

## 空也一遍の踊り念佛について

橋 川 正

わが國に佛教の傳來ありしより以來、國民社會生活の上に及ぼしたる影響は多様であつて、時代の推移に隨つて、益々色彩の變化を複雑にしてゐる。蘇我氏一族等の佛教愛好者ならびに歸化人によつて生み出だされた崇佛の風は、次第に宮廷貴族の間に浸潤し、奈良朝に入つて聖武天皇自ら佛子沙彌勝滿と稱し給ふや、崇佛の風爰に國家的となつて、上下都鄙を通じて風靡する機運をつくつた。佛教本來の面目は世塵を超越せんとするにあらうが、わが國の佛教は常に何らかの形式によつて國家生活と關聯し、現實生活を離れない點に獨特の色彩を有する。

今奈良朝平安朝時代の佛教と鎌倉時代の佛教とを比較すれば、その相異點は種々指摘し得やうが、概観して前者の貴族的色彩の濃厚なるに比して、後者はどこまでも平民的色彩をその主調として居る。

然しながらこれによつて鎌倉時代以前に於て、佛教と庶民階級とが全く關係を結んでゐないといはうとするのではない。日本現報靈異記或ひは三寶繪詞、今昔物語等を開けば、その隨處に庶民階級の間流布した佛教を見得るが、それはそれらの時代を通じての主脈ではない。

平安朝末期より鎌倉時代初頭に亘る家人郎黨の解放即ち武士階級の勃興は、社會史上の一大廻轉期を劃し、時代開展の勢を激成したが、この時期に際して唱道された法然上人の念佛宗教は濁世相應の妙法として、人々の胸底を衝いたのである。平家の西海没落と共に、寶刀の海底に沈んだことと武家の勃興との間に、はかり知られぬ因果關係

の存するが如くながめてゐた當時の人々は愚管抄、めざましき時代の推移をまのあたり見て、深刻な述懐に呼吸をつぐ暇もなかつたのである。然し法然上人以前に淨土教が無かつた譯ではない。上古に聖徳太子あり、奈良朝に智光禮光あり、平安朝に入つては空也あり、良忍あり、源信あり、永觀あり、其他なほ數多の人々があらうが、學究的教

理から解放されて、純粹に念佛のプロバガンダを行ふたのは法然上人及びその門下の人々であつて、わが佛教史上前代未聞の事に屬する所以である。法然上人の歸依者には藤原兼實の如き貴顯の人々も少くないが、新たに起つた武家階級と一般の庶民階級とを包攝して、これを他力易行の念佛を以て潤し、同一念佛無別道故の旗幟を表明したのは刮目すべき點である。「念佛を修せんところは、貴賤を論せず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし」といつた上人の言葉は

行狀書國、年と共に實現され、法然上人の教の迅速に流布せられたことは、建久九年に成つた撰撰集が、數年の間に紀州藤代王子にこもる一老僧の手に入つたのもわかるのである。明惠上人行狀、上人の念佛宗は漸次地方傳播の歩を進めたが、その系統よりいへば西山義にして、證空上人の下より出た一人に一遍上人がある。

證空—聖達—聖惠

—聖觀

—一遍建長七年中出家學問後諸國遊行  
今豫川野七郎通弘子

—仙阿無智 一遍弟

—聖戒有智 一遍弟

(靜見の法水分流記による)

「後世者はいつちも旅にいでたるおもひに住するなり。つねに一夜のやごりにして、始終のすみかにあらずと存するには、さはりなく念佛の申さるゝなり」一言勞談とは遁世者の心底を穿てる言葉で

あるが、これを體現して行雲流水の念佛生活にその一生を托したのは一遍である。一遍聖の生誕は延應元年に當り(一遍聖人繪傳によつて推算)、法然上人の滅後正に二十七年である。聖は筑前太宰府の聖達さては肥前の華臺に師事して修學したが、聖の活くべき天地をそこに見出さなかつた。上人の要求は文字記章にもなく理談教義にもない、正に口稱念佛の實行體現にあつたのである。聖が阿彌陀

經をよみながら、所持の書籍悉皆焼き棄て、「一代の聖教皆つきて南無阿彌陀佛になりはてぬ」といつて、臨終往生したことは、聖の中心を流れてゐた宗敎の發露であつて、その生涯の行化は遺教として著述を世に留めるのではなく、又寺院堂舎の建立でもなく、普く勸進した念佛の命脈を傳へるにあつたによつても知られる。「身は是にて候へども心は遊行にて候なり」他阿上人法語とは、一遍聖の信仰をよく傳へたものであつて、住處の執著は

いふまでもなく、一切の執著から離れんとした「捨聖」の唱道によつて生れたのが、一遍の敎團である。「居所の心になはぬはよきことなり、こゝろにかなひたらんにはわれらごとくの不覺人は一定執着しつべくおぼへ候なり」といつた明禪法師の言葉は一言芳談、これら後世者遁世者に共通な思想といふことが出來やう。

## 二

一遍聖が踊躍念佛を行ふたのは、弘安二年信州善光寺に參詣した歸途「小田切の里(上水内郡)或武士の家形」に於てはじめてのに基くといふ繪傳。その敎理上の根據は大無量壽經の曾更見世尊、即能信此事、謙敬聞奉行、踊躍大歡喜の文、善導の行者傾心常對目、騰神踊躍入西方の釋文及び空也上人の遺教である。踊躍歡喜の文字はその他經論釋の上に徴すべきものはあるから別に述べる必要も

ないが、こゝで空也と一遍との關係を少し討ねたい。一遍聖繪(六條縁起)にいふ所によれば「抑ぞり念佛は空也上人或は市屋或は四條の辻にて始行し給けりかの詞云、心無所緣隨日暮止、身無住所隨夜曉去、忍辱衣厚不痛杖木瓦石、慈悲室深不聞罵詈誶、任口稱三昧市中是道場、順聲見佛息精即念珠、夜々待佛來迎、朝々喜最後近、任三業於天運、讓四儀於菩提矣」とするが、こゝに引かれた空也の言葉は他に見るべきものがない。兎に角一遍によつて、かくの如く信せられかくの如く傳へられるのである。「行者の信心を踊躍のかたちにしめし、報佛の聽許を金磬の響にあらはす」を以て、一遍は往生人の行事としたのである。こゝに特に注意すべきは市中是道場の語であつて、弘安元年に備前の「福岡の市といふ所にて念佛すゝめ」たこと、あはせ考へねばならぬ。福岡の市とは邑久郡に屬し、備前刀工を出す地であつて、壽永

空也一遍の踊り念佛について

年間の人として劔工則宗の名が傳へられてゐるから、一遍が地方に於ける人足繁き地を選んで念佛勸進をしたことがよく窺はれる。而して一遍が空也を追慕してゐたことは、弘安七年奥州坂東を勸め廻つて入洛した砌「空也上人の遺址、市屋に道場をしめて數日をおく」つたのによつても明かであつて、一遍聖繪にはこれを説明して「市屋にひさしく住給し事はかたぐ子細ある中に、遁世の始空也上人はわが先達なりとて、かの言どもを心にそめて口ずさみ給ひき其中に、求名爲願衆心身疲、積功爲修善希望多、不孤獨無境界、不如稱名拋萬事、閑居隱士貧高樂、禪觀幽室者爲友、藤衣紙衾是淨服、易求無盜賊恐文、此文によりて始四年は身命を野にすて居住を風裏にまかせてひとり法界をすゝめたまひき」といふ。空也上人の市屋とは市堂とも呼ばれ、平安左京の東市即ち堀川の西、北小路の南北に涉つた地點の中、市堂は北小

路の南にあつたといふ、後の金光寺と稱するもの即ちこの市屋道場である。拾芥抄、京程圖、平安通志。一遍聖人繪詞傳直談抄。

空也にしても一遍にしても、衆人の群集雜沓する市を利用して念佛をすゝめたのであつて、こゝに庶民階級と密接な關係を結ぶに至つたのである。

かくの如き先驅者として奈良朝にすでに行基があるが、特に市聖、市上人と呼ばれた空也に注目したい。空也と前後して出た安然に市和尚の名があつた二中歴、彼は貧窮して市廓の間に食を乞ふたといふが、空也の如く念佛勸進をしたのでないから多少の差別をせねばならぬであらう。阿彌陀聖の名は日本往生極樂記、扶桑略記、實に空也の面目を傳へて居るのである。

### 三

空也はその自稱で空也諱、元亨釋書、名は光勝、姓氏をいはず二十有餘の時(釋書にはたゞ弱冠といふ)尾張

國々分寺で剃髮して沙彌となつた。その姓氏をいはなかつたゝめに古來皇子だとする説もある。宇治拾遺物語に既に餘慶僧正の語として「貴き上人にておはす、天皇の御子とこそ人は申せ」といふから、隨分早くからこの説のあることが知られる。

空也の行蹟は後に述べる如く行基に頗る似て居る點もあるが、第一その足跡の區域よりいへば、行基が畿内を中心とせるに對して、空也は奥羽二州夷狄の地にまで及んで居る。彼は佚遊を好み、その道すがら救濟に志し、諸種の土木工事を起したばかりでなく、荒原曠野に暴された人の遺骸を焼いたりなごした。水なき地には多く井を掘つて念佛を唱へ、阿彌陀井と名づけたといふ。元亨釋書、空也上人繪詞傳宇治拾遺物語によると供に若い三人の聖を供して居た。「一人は繩を取り集むる聖なり。道に落たる古き繩を捨て壁土に加へて古堂の破れたる壁を塗る事とす。一人は瓜の皮を取り集めて、水に洗ひ

て獄衆に與へけり。一人は反古の落ち散りたるを拾ひ集めて、紙にすきて經を書き寫し奉る」といふやうに、三人の分擔する處各自異つてゐるのは空也及びその門弟の行ふた社會奉仕を代表して居るとも見られやう。空也傳中に廢寺を修しとあるのは正しく第一の聖の分擔である。第二の聖は關東往還記に見える忍性・頼玄が鎌倉の濱悲田、大佛悲田を慰問し、疥癩宿を訪れた事蹟の先驅として注意すべきであらう。又空也が應和三年八月二十三日鴨川原で供養した金字般若經の如きも日本記略扶桑略紀、第三の聖の分擔によつて書寫されたのであらう。空也と同じ時代に京都の市内を徘徊した皮聖行圓(革上人)がある、彼はもと鎮西の人、寒熱を論せず鹿皮を着け首に佛像を戴いてゐた。寛弘二年七月二十五日、一條北邊の行願寺即ち草堂に於て八講を修するや、貴賤多く結縁したといふ日本記略。空也とあはせ見る時、この時代の俗間信仰を

空也一遍の踊り念佛について

偲ぶことが出来る。空也は普通に天祿三年九月十五日、七十七歳を以て没したといふが、源爲憲の空也誄には(續群書類從に收む、天治二年の寫本名古屋市眞福寺に藏す)には「惟(以下數字不明)十一月空也上人没于東山西光寺嗚呼哀哉」といふ年號の缺けてゐるのは遺憾であるが、十一月といふから通説に誤りがあらうと思はれる。空也と爲憲とは同時代の人であるから、空也に關する最も確實な史料はこの空也誄であらう。空也の墓と稱するもの常陸國新治郡志士庫村実倉にあるが、信すべきものかどうか未だ確めない。

空也の行蹟に最も近い人を上代に求めるならば行基をその首として擧げねばならぬ。凡て諸の僧徒浮遊せしむる勿れとは養老二年十月の太政官が僧綱に傳達した文中に見えるところであるが、これは行基等一味の人々の群衆運動を警めたのであつて、百姓を妖惑し、道俗擾亂し、四民業を棄つ

とは續日本紀の傳ふる言葉である。行基は新羅國大臣惠基と共に阿彌陀佛を申して諸國を遊行したといふ<sup>年譜</sup>。而してたい佛名を稱へるばかりでなく、橋を架け池溝を掘り或ひは船息を設け布施屋を置いたことは延暦二十三年三月十九日所司記として年譜に見える處であつて、詳細にその統計を解けて居る。行基が單純な彌陀信仰者でなかつたことはいふまでもないが、その行蹟は甚だ空也に類して居るといふよりも、むしろ空也は行基に學んだのではないかと思はれる位である。然しその間の連絡は歴史上明かでない。然し行基は佛名を稱へただけで、踊躍念佛をしたのではないから、その間に相異點も存する譯である。空也以前に踊躍念佛の先驅者をわが國に求めることは出来ぬが視野を轉じて朝鮮半島を見ると、意外にも踊躍念佛の先驅者新羅の元曉を發見するのである。進んで元曉のことを少し述べやう。

## 四

元曉のことを述べるに先立ち七祖他阿の條々行儀法則(三大師法語)を開くに、第五に踊躍念佛事といふ項目を擧げ、初祖一廻の先驅者として「漢土ニハ少康、日本ニ空也」といつて居る。即ち踊躍念佛の傳統上より支那に於ては少康、日本に於ては空也を擧げるのであるが、空也のことは既に明かであるから暫く措き、少康について一言せねばならぬ。鎌倉時代の淨土敎に於て一般に用ひられた少康の傳記は恐らく法然上人の類聚淨土五祖傳に指を屈せねばならぬであらう。五祖傳には宋高僧傳、新修往生傳及び龍舒淨土文を引いて少康の傳が綴られて居る。宋高僧傳(二五)による「築壇三級、聚人午夜、行道唱讚、二十四契、稱揚淨邦、每遇齋日、雲集所化三千許人登座、令男女弟子望康面門、即高聲唱阿彌陀佛、佛從口出誦十聲十佛、若連珠狀」など、あつて、常に高唱念佛し、念佛の入道路に盈つといふ盛況を呈したのは事實であるが、踊躍念佛に關しては徵すべきものはない。七祖他阿は蔡州和傳要にも「空也上人は三論眞言等ヲ修學シ給ヒケレドモ念佛行者ト成テ宋朝ノ少康法師ノ跡ヲタツテ踊躍念佛シ給ヘリ」といふが、どうも少康の傳記に踊躍念佛のことが見えないばかりでなく、空也自身が少康の遺風を學んだことに明證もない。

遍一自らも空也のこまはいつて居るが、少康のこまには及んで居ない。或ひは少康を踊躍念佛の先驅者に數へるこまは一遍以後時宗の内部に於て創唱された説ではなからうか。少康については歴史的に肯定しかれるのであるが、今日まで餘り顧られてゐない新羅の元曉をこまに擧げたい。

元曉は新羅眞平王三十九年(西紀六一七。わが推古天皇二十五年)に生れ、海東華嚴の初祖と稱せられる義湘と共に支那に留學し、幾多の經典を研究し疏釋に力めた碩學であるが、後奇縁により瑤石宮寡公主と婚しその間に薛聰の生るゝや(三國史記)性行全く一變しこまに後半生の開展を見るに至つた。事の詳細は三國遺事(四)に載せられて居るのであつて、「舞弄大瓠、其狀瑰奇、因其製爲道具、以華嚴經一切無碍人、一道出生死」、命名曰無碍、仍作歌流于世、嘗持此千村萬落、且歌且舞、化詠而歸、使桑樞瓮、牖獲猴之輩、皆識佛陀之號、咸作兩無之稱、曉之化大矣哉」といふ。これによれば數奇なる元曉の晩年生活は、大瓠を弄びて、千村萬落に歌舞し、庶民下層の階級に念佛の法門を大いに傳播したのである。三國遺事のこの記事は殆んど全文李能和氏の朝鮮佛教通史(上六二)に引用されて居る。こまに注意すべきは元曉が口に乗へた一切無碍人、一道出生死の語である、さすがに華嚴教學の研究に没頭した元曉は、この晩年生活に於ても華嚴の語は夢寢の間

空也一遍の踊り念佛について

も忘れ得なかつたのであらう。因みにこの語は舊譯華嚴經明難品の偈中に出てゐるころである。宋高僧傳に收められた元曉の傳には、大安聖者名は不明なる人が出て居つて、元曉に金剛三昧經の講義をすゝめたといふが、この人も廓亦恒に市にあつて銅鉢を撃ち、大安大安と唱へたいふ。この元曉にしても大安聖者にしても、その行狀を思ふに何れも市聖踊躍念佛の先驅といふことが出来やう。時代はわが朝の飛鳥時代に當るが、この頃早くも朝鮮半島に於てこの風の既に存在したことが察せられるのであつて、新羅のこの人々もわが空也との間に直接何らかの脈絡があつたと思はれぬけれども、この風潮の源流をこまに求めやうとするのである。空也の遺流を酌む鉢叩念佛が、後世鉢に代ふるに瓠を以てしたといふが(雍州府志)元曉が大瓠(李能和氏は葫蘆の字を用ひて居る)を弄んだこまに徴せば、この説は一考を要すべきであらう。前に引いた七祖他阿の語中に「高麗盛有此行儀」といふから、新羅時代の餘風の半島内に傳へられてゐたことを聞知して居たのであらう。

而してこまに忘るべからざるは大安聖者の傳説が、鎌倉時代既にわが國に知られてゐたことである。即ちその有力なる徵證として高山寺の華嚴緣起を擧げねばならぬ。この緣起の繪の筆者について或ひは光信といひ光長といひ、或ひは信實といふ(考古叢書)



今日では大體傳信實として居るけれども、なほ疑ふべき餘地がある。繪の筆者の吟味は他の機會に譲るが、この縁起の製作が鎌倉時代を降るべからざる事は何人も認めるところである。この縁起の裏打より發見された元龜元年の文書によると、この縁起もさもと九卷あつた中元曉大師繪といふもの二卷を擧げて居る。この元曉に關する繪を披いて見るのに、はからず宋高僧傳に記されて居る大安聖者の姿に接するのである。圖は王の使が聖者を迎ふべく馬より下りて、聖者に向つて立つて居る。聖者は身に弊衣を纏ひ足に草鞋を穿ち、左手に鉢を支へ右手に撥を持つて居る。頭髮は伸びるがまゝに任せて、その姿の傍に「大安々々」と記し又「かかる非人王宮へまわり候てなにの御たうの候へき」との詞がある。それに續いては市場の有様で、「それをはいくらこのたまふそ」「あゝ」「三百ばかりさは思候へともいくらにもめせかし」「このぬのはひろさあり」などの賣買の言葉を記し、「なれに物のならはかさんあらかなしやおうく」と喧嘩口論をしてゐるのも見ゆる。何れにしても、聖者の周圍を巧みに描出し、市聖たる面目を發揮せしめて居る。かくの如く既に繪畫の上にまで現はれて居るのであるから元曉傳に附帶してこの事蹟のわが國に傳へられてゐたことは明かである。

以上の如く朝鮮半島に於ては先づ元曉大安聖者に指を屈し、下

つてわが國の空也一遍にこの流れを辿ることが出来る。空也と一遍の間に連絡あることは明かであるが、前にいつた如く空也以前の連絡は確かでない。たゞかくの如く源流を尋ねるだけで満足しておかねばならぬ。

## 五

終に一遍の系統と眞宗教團との關係について一言しておかねばならぬ。一遍聖は正應二年五十一歳で入寂したのであるから、その生誕は正に延應元年であつて、親鸞聖人六十七歳の時である。而して弘長二年聖人入滅の時、聖はまだ二十四歳の青年で、その翌年五月二十四日、聖は父如佛の長逝にあひ「世をわたりそめて高ねの空の雲たゆるはもとのこゝろなりけり」といたく無常にうたれ、後年に於ける遊行生活の動機は熟しつゝあつたのである。

親鸞聖人は貞觀頃の敎信沙彌の風を慕ひ「僧にあらず俗にあらざる儀を表して敎信沙彌のごとく

なるべし」改邪鈔といひ、「つねの御持言にはわれはこれ賀古の教信沙彌の定なり」同上といふのであるが、一言芳談に現はるゝ念佛者達や一遍流の人々とは全く異なるのであつて彼等とは絶待に「うしろあはせ」であつた。即ち彼等の振舞は後世者遁世者を先とするが、聖人はたとひ牛盜人といはれども佛法者後世者らしくあつてはならぬといふのである。こゝに根本的の相異なることを知らねばならぬ。聖人は尼惠信を娶り惠信は男女六人の君達の御母儀となられたのであるが、この點に於ても一遍とは非常に距離がある。一遍は念佛の機に三品ありとして

其上根者帶於妻子雖勵家業不著往生

其中根者雖捨妻子帶於住處衣食不著往生

其下根者雖捨諸緣得往生也播州問答

と分ち、一遍自らはその下根に屬すといひ「如吾輩者既是下根之一分也、若不捨一切必定命終等、

空也一遍の踊り念佛について

耿著諸事可損往生、常憶常念、應當思量者也」と告白してゐる。又「この時衆ごもは今度往生一大事の爲に妻子財寶を厭離し名利我執の心をも捨て、慢心虚假の情識にもほだされずして決定すべき信心をもてこそちかひをなし」他阿上人法語といふのに一遍流の人生觀はよく窺はれるのである。親鸞滅後に於ける眞宗と一遍流との關係については先づ覺如上人の改邪鈔を擧げねばならぬ。改邪鈔は建武四年の製作であるが、一遍の寂後正に四十八年、二祖他阿の寂後十六年に當り、時衆の教團は旭日東天の勢を以て都鄙をあまねく風靡せんとしつゝあつた時である。則ち改邪鈔の中に「遁世ノカタチヲコト、シ異形ヲコノミ裳無衣ヲ著シ黒袈裟ヲモチキルシカルベカラザル事」なる項目を設け、「當世都鄙ニ流布シテ遁世者ト號スルハ多分一遍房阿彌陀佛等ノ門人ライフ歟、カノトモガラハム子ト後世者氣色ヲサキトシ佛法者トミヘテ威

儀ヲヒトスカタアラハサントサダメ振舞歟」といひ、大にしては眞宗門侶の誘拐せられることを警め、小にしては親鸞聖人の服裝の維持につとめられたのである。踊り念佛の系統の人々にはこの「異形」を好むといふことは免れなかつたのである。

新羅の大妄聖者も「不測之人也、形状特異」宋高僧傳といふから、共通した特色と見做される。覺如上人はかくの如く改邪鈔を著して大いに眞宗門侶の相續に心を碎かれたが、一面既に邪風のために犯されたものゝある事を物語るのである。今はその邪風の中特に一遍流の踊り念佛が、眞宗門侶の末派の間に行はれた點を指摘しておきたいのである。それは即ち越前の大町門徒である。大町門徒は如道を先徳とするが、如道その人は高田の系統で三河和田門徒の圓善の門から出てゐる。現に福井市專照寺に藏する八列祖九列祖の影像に徹して眞佛、專海、圓善、如道の次第なることは明かであ

る。應長元年五月には覺如上人自ら存覺を從へて越前に下向し、大町如道の許に二十日餘も滞在し教行信證を講談傳授せられたが存覺一期記 鏡御影裏書、後如道は新義を骨張したと傳へる三門徒法脈。その新義については種々議すべきことがあらうが、とりわけ踊躍念佛を實行したことは事實と察せられる。

このことに關してこの門徒を非難した愚闇記なるものがある。著者は何人であるか明かでないが、冒頭先づ「孤山隱士ヲロカナル心ニテ管見所及二十箇條ヲ記シテ名ヲ愚闇記ト有二人誹謗者」其才學ヲ見テ我愚意テヒルガヘシ自他共ニ佛道修行スヘキハカリコト也此記ヲ見人必可有返札」と筆を記して居る。孤山隱士なる匿名でこの書を發表したのである。その所謂二十箇條の中に

- 一 踊躍念佛無ニ本説一事
- 一 踊躍衆面々飯汁御菜混合事
- 一 踊躍衆網衣ヲ死人上引覆事

一 踊躍於道場、連歌之事

一 踊躍門弟等六字、名號、南無之事義立事

など、盛んに踊躍の文字が現はれてゐるのであ

つて、殊にその踊躍念佛の状を守して「女ハ綾羅

錦繡之類身ヲ粧面ニ粉塗眉青齒ヲ黒頭ニ長髮懸衣、燒

物薰偏傾城ノ姿也男女雜居ニシテ通夜行住坐臥心心

潜通スル在人哉唱念佛穢虛假行成ラシ塗飭香鬢戒門

制也」と述べて居る。これには多少感情に奔つた

誇張があらうが、一遍流の踊り念佛の影響を受け

てゐたことは事實である。この愚闇記に對して辨

駁したものが即ち愚闇記返札であつて、現に如道

の自筆と稱するものを專照寺に傳へて居る。なほ

誠照寺には如覺の自筆本と稱するものがあると同

寺の誌要に見えて居るが、まだ親しく見たことが

ない。今專照寺本によつて見るのに「謹以淨土眞

宗者一代聖教、肝心ニ尊諸佛ノ秘懷也」と書き出し

踊躍の根據として先づ大經の歡喜踊躍を擧げ善導

の禮讚その他坐禪三昧經などを列べ「踊躍名言經

文分明也、無本說可云歟」と反して居る。何れに

しても、踊り念佛を行つたことは疑ふべからざる

ことである。返札の中に「曾祖親鸞ハ始爲天台門業

慈鎮風義ヲ學ヒ後ニ淨土ノ枝葉ト成テ法然之法流自受

已來專此勸化門徒等ニ博ル者也」といひ、親鸞を曾

祖とするのは注意すべきことである。これを要す

るに覺如上人が改邪鈔の中に批判された事實が同

じ眞宗の末派の間にあつたことは十分察すること

が出来やう。

以上空也一遍を中心として、新羅の元曉大安聖

者に溯り、下つて一遍の流派と眞宗との關係を述

べ、踊り念佛の影響を受けた大町門徒を擧げ、こ

ゝに踊り念佛の人々源流を發するところ影響を與

へたところを觀察したのである。(完)